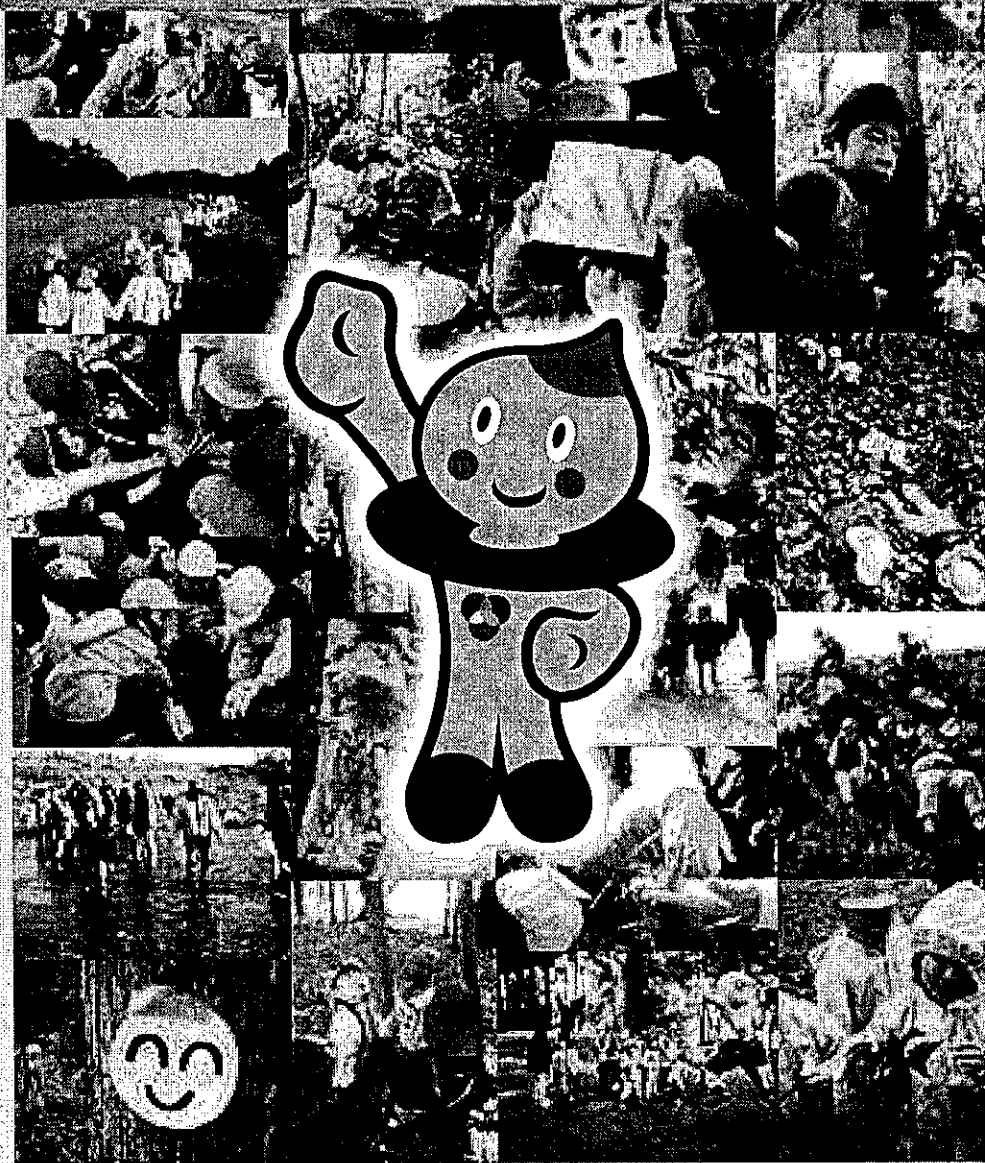


幼児のための自然体験プログラム集

# 新 うおーたんの 自然体験プログラム



滋賀県

# 目次

## 準備編

1. わたしたちの大切な思い出とつぶやき	1
2. 幼児期における自然体験学習のすすめ	2
3. 子どもたちにメッセージを届けよう!	4
4. シンボル(象徴)を活用しよう!	5
5. 自然を感じるための10のヒント	6
6. 自然体験に必要な保育の姿勢	8
7. プログラムデザイン	9
①下見のポイント	
②プログラム(あそび)の作成	
③プログラムをデザインする時の留意点	
8. 服装と持ち物	12
9. お役立ちアイテム	14
10. 気をつけよう!危険な動植物	17
11. 応急手当	18
12. 防災の心構え	20
13. 実践現場でよくある質問(Q&A)	22

## 実践編

14. プログラム集の活用にあたって	26
15. プログラム様式	28
16. プログラム一覧	30
17. プログラム集	
1 森・山・里山・社寺林をフィールドとしたプログラム	31
2 川・湖・池をフィールドとしたプログラム	73
3 田畑・野原・園庭・公園をフィールドとしたプログラム	91
18. ひろげよう!まなぼう!	118
①園で取り組もう! 環境保全活動	
②実践でつかおう! おすすめ絵本	
③記憶にとめよう! 先人の知恵袋	

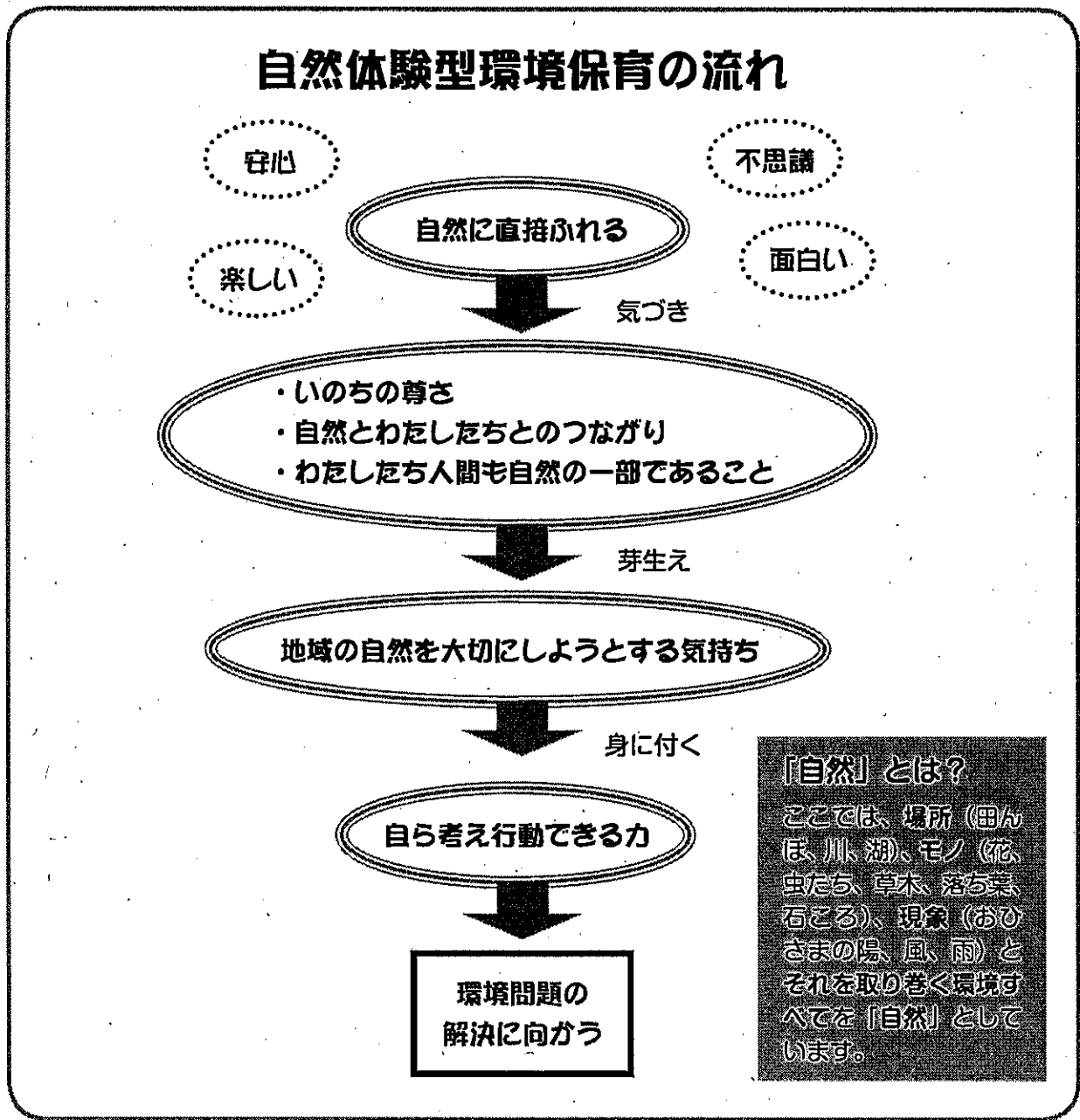
## 資料編

19. プログラム作成協力園・所・学校等一覧	121
20. プログラム集作成関係者一覧	122

## 2. 幼児期における自然体験学習のすすめ

幼児期は、大人のすることや自ら体験したことを「ごっこ遊び」に発展させて興じます。保育者との日常生活の中でも、言葉の遣い方や接し方をよく見えています。家庭において「給食のお当番さんごっこ」や「お昼寝ごっこ」をする話は、よく聞きます。体験したことはストレートに脳にインプットされ、自分の行動に定着させる時期だからでしょう。

家庭や身近な地域社会において、家畜を飼っていたり、米や野菜、草花の栽培などされている場合、少しでも手伝いの体験があるか否かで、遊びの広がりも違ってくるものです。自然現象や社会現象への興味関心も深まり、体験が自信につながる発達の過程であり、まっすぐ物を見つめて考える力も出てくるこの時期に、自然体験学習をすすめる意義は大きいものです。



## 7. プログラムデザイン

自然体験型環境保育の「プログラムデザイン」とは、

①「自然体験型のプログラム（あそび）をつくること」

②「プログラムをつなげ、メッセージ性のある保育の流れをつくること」

の2段階があります。効果的にデザインするために、下見は大変重要です。

### ①下見のポイント (十分な下見が円滑なプログラムの実施にもつながります)

👉遊びのねらい・目的を定める。

👉まず自分が楽しむ。

「これはすごい!」「これは子どもに伝えたい」と  
思えることを発見する。

→p6「自然を感じるための10のヒント」参照

👉遊べるスペースが十分かどうか確認する。

👉発見したことをねらいと照らし合わせて絞り込む。

👉経路等の確認をする。

- ・地図なしでも迷わずに行けるか。
- ・トイレや休憩できる場所はあるか。
- ・お弁当を食べられる場所はあるか。
- ・雨宿りできる場所はあるか。 等

👉安全の確認をする。

- ・交通量や、安全に道を渡れるかどうか。
  - ・ケガにつながりそうなものはどれか。
  - ・触ったりなめたりすると危険な植物等はどれか。
- (例1) ウルシ：そばを通っただけでかぶれる人もいますが、そっと触れる程度  
ならかぶれることは少なく、葉の汁が付いたらかぶれる。
- (例2) 田んぼ：除草剤が散布されていないか確認する。
- ・緊急時（ケガ、病気、不審者等）の対応方法を想定し、準備をしておく。

👉下見で確認したポイントをメモや写真で記録する。

👉直前にもう一度、現地確認する。

天候などにより短期間に状況が変化してしまうことがあるので、可能な限り直前にもう一度  
現地を確認しましょう。



下見の様子

「危ないから」ともやみに遠ざける  
のではなく、危険回避の方法を考え  
る経験をさせることも大切ですね。

p17「気をつけよう!  
危険な動植物」参照



支援者(保育者)自ら葉を味わってみる



現地で得た情報をもとに検討中



## ②プログラム(あそび)作成

- 「3.子どもたちにメッセージを届けよう!」、  
「5.自然を感じるための10のヒント」、  
「6.自然体験に必要な保育の姿勢」 を踏まえて、具体的なプログラムをつくってみましょう。

### プログラム作成に必要な項目

自然体験型保育で実践する「あそび」をつくる際には、次の項目を目安に組み立てていきます。  
プログラム集を参考にして、独自のあそびをつくってみましょう。

→具体的な内容は、p30~のプログラム参照

#### 👉あそびの名称

自分たちの園(地域)で取り組むという意識を高めるために、園(地域)独自の名称を付けてみましょう。

#### 👉対象年齢

〇歳から〇歳まで、年少、年中、年長、異年齢 など

#### 👉目的・ねらい

子どもたちに何を伝えたいかを考えましょう。

#### 👉実施人数(支援者・幼児)

個人、グループ、クラス全体 など

#### 👉実施時間

午前、午後、30分、1時間 など

#### 👉フィールド(実施場所)

森、社寺林、里山、川、池、湖、田畑、野原、園庭、公園 など

※園外のフィールド(私有地や公共の敷地)を使用する場合は、必要に応じて事前に承諾を得ましょう。

#### 👉実施時期・季節

春、夏、秋、冬、一年中、雨天時、降雪時 など

#### 👉自然を感じるポイント →p6 p7「自然を感じるための10のヒント」参照

みる、きく、ふれる、においをかぐ、味わう、なりきる、つくる、育てる など

#### 👉活動内容

どのような手順で、どこで、何をするのかを考えましょう。

#### 👉準備物

事前に準備するもの、その場で準備するもの など

### ③プログラムをデザインする時の留意点

作成したプログラムについて、次の視点でチェックしてみましょう。

#### チェック Ⅴ

- 下見は十分にできましたか？ →p9「下見のポイント」参照
- 子どもが楽しめるものですか？ →p3「自然体験の『楽しさ』とは？」参照
- ねらい（子どもたちに何を伝えたいか）がはっきりしていますか？
- 安全に配慮されていますか？ →p9「下見のポイント」参照
- 流れ（人の動き、内容等）はスムーズですか？
- プログラム終了後のフォロー（園や家庭へ帰ってからの対応）を考慮できていますか？
- 天候（気温）に応じた内容になっていますか？
- 支援者（保育者）・保護者・地域の人々の理解と連携がとれていますか？
- 年間計画の中での位置づけはどうなっていますか？

